

グループインタビューでの発言・キーワードまとめ

表記方法について

キーワードとなるような部分に下線

グループインタビュー

令和 8 年 1 月 29 日(木)13:30~15:30

ショーケー本館ビル 2 階会議室

令和 8 年 4 月 15 日(水) 10:00~11:50

仙台市役所 2 階会議室

テーマ（1）地域の困窮について（過疎化、担い手不足、孤独・孤立、居場所を含む）

1. 担い手不足の深刻化

- ◆ 居場所づくりや見守り、助け合い活動などの仕組みを作るのは難しくなっている。関わりたくない、働いていて負担になるから、気持ちはあるけど協力できないと言われる。
- ◆ 30 代、40 代は自分の生活で手一杯で、余裕がないと感じる。学校教育関係でもこども会や PTA がなくなっていることに加え、役員の担い手が固定化している。
- ◆ 地域活動における参加者・協力者が減っており、担い手が高齢化している。また、世代交代・後継者探しにも苦労している。
- ◆ 社会福祉法人も経営課題や担い手不足の問題を抱えており、どの産業も担い手不足である。
- ◆ 地域活動を行う上で、活動費を確保することにも苦しんでいる。
- ◆ 財源不足や担い手不足の中、新しいものを作るのはなかなか難しい。今ある団体の活動継続支援や今関わっていない人・社会資源をどのように地域に取り込んでいくか。
- ◆ 若い人たちは自分の生活を優先するのは当然だが、地域づくりに関しても無理のない範囲で協力してもらえる仕組みを作る必要性がある。
- ◆ つながりの希薄化は地域で活動する側にとっても深刻な課題だと感じる。活動を継続・拡大しようとしても、後継者や担い手が見つからないなど、人材面での課題も顕在化している。

2. 地域のつながりの希薄化・相互扶助の弱まり

- ◆ 町内会でのお祭り・花火大会・運動会といった活動がコロナ以降特に縮小しており、活動が少なくなっている。
- ◆ 居場所づくりや見守り、助け合い活動などの仕組みを作るのは難しくなっている。関わりたくない、働いていて負担になるから、気持ちはあるけど協力できないと言われる。（再掲）
- ◆ 町内会への加入勧奨は断られるのが一般化しつつあり、相互扶助の前提が揺らいでいる。また、町内会加入率の低下により、担い手の負担感もさらに増している。
- ◆ 隣近所で支えあいをしてほしいと思っても、「税金を払っているんだから行政に頼めばいい」といわれることもあり、支えあうという意識が低くなっている。
- ◆ 地域のつながりが強すぎるのを嫌う世代も増え、いざというときには助けてほしいが、普段はあまり深入りしないしてほしい、深入りしたくないという人も多い。

- ◆ 地域住民が相互に協力し、地域福祉の推進を進めなければならないという周知啓発が不足しているのでは。
- ◆ 町内会や地区社協のサロン活動等においても、出席する担い手や参加者が固定されている。居場所づくりをした際にどうやって参加者の幅を広げていくかが課題。
- ◆ ライフスタイル・価値観の変化により、「お金にならないことは頑張らない」という色合いが強まり、福祉の展開が難しくなっている。
- ◆ 住民同士の関係が弱まったことで、支援を必要とする人の存在が見えづらくなり、発見や対応が遅れやすくなっている。また、活動を継続・拡大しようとしても、後継者や担い手が見つからないなど、人材面での課題も顕在化している。

3. 孤独・孤立

- ◆ 日常的なつながりが希薄になったことで、孤立や生きづらさが一層深刻化しやすい状況になっていると感じる。特に、単身高齢者世帯や子育て家庭、就労や生活に不安を抱える人々にとって、地域のつながりの弱体化は、困りごとを抱えた際に頼れる相手が見つからず、生活の不安定さに直結する大きな課題であると考える。
- ◆ 個人の選択の自由が広がるなどの社会的背景が関わって孤独・孤立や居場所の問題があると感じる。
- ◆ 表面的にはつながりを求めている高齢者や障害者も増えてきていると感じる。一方で、心のどこかではつながりを求めているが、身寄りがいなかったり近所付き合いがなかったりでつながり方がわからずに困っていたり、SOSを発信できない人もいるのではないか。
- ◆ 住民同士の関係が弱まったことで、支援を必要とする人の存在が見えづらくなり、発見や対応が遅れやすくなっている。
- ◆ 8050 問題などについて、世間体を気にしたり、自分でどうにかできると思ってる人達もいて支援を求めている人もいる。そのような人たちとどのようにつながりを作っていくか。
(再掲)
- ◆ 孤独孤立について、身体障害者はバリアフリーの問題や情報の取得方法など生活上の障壁があり、孤独感を感じやすい。障害者の孤独孤立の解消には社会的障壁の解消やバリアフリーに取り組む必要がある。

4. 複合・重層的な課題の顕在化

- ◆ 一人暮らし高齢者、80 代夫婦、8050・9060 問題などの複合課題が顕在化している。
- ◆ 障害者の親亡き後問題や、親が高齢になり介護サービスが必要となるケースが増えてくるなど、介護と障害の問題を一体的に考える必要がある状況にある。
- ◆ 高齢者の住まいの問題も課題である。孤独死等のトラブルを不動産が嫌い、特に単身高齢者の住まい探しが難航する実態がある。
- ◆ 障害者も住まいの問題を抱えている他、障害者の地域への定着に対する理解が足りないと感じる。

- ◆ 老々介護、認認介護の世帯も増えてきている。また、頼れる身寄りがいない人が増加している。特に、経済的に困窮している世帯への支援が課題である。
- ◆ 生活困窮の分野においても単なる借金や経済困窮だけではなく、一人ひとりの課題が多くなっている状況であると感じる。
- ◆ 頼れる身寄りがいないと、例えば高齢者の場合は交通手段がなかったり同行者がいないため受診できず、悪化してから医療につながることもある。そのような者に支援を届けたり、ニーズをキャッチするための取り組みが必要である。

テーマ（２）これから求められる福祉の視点について

1. つながりを軸にした地域福祉の構築

- ◆ 「支える人たちが地域でつながりを持つこと」「困窮している個人の支援をどう進めるか」という二つをどう満たしていくか。
- ◆ 薄い濃いはあるが、つながりを持てないと生きていけない。薄いつながり、濃いつながりをうまく取り入れられるようなものがあると良い。
- ◆ 自分にとって都合のいいつながりを求める人が多くなってきている。地縁、趣味など、一人の人がいろんなチャンネルを持って、それぞれ関係性が作られると孤独・孤立が少しやわらぐと思う。
- ◆ しがらみは嫌だけど、人とつながりたい、いざという時には助けて欲しいという思いは誰しも持っているはず。つながりたい人、つなげる人双方の負担が大きくなならないような、持続可能性のある支えあいの生活を実現するという視点を整理ができるとよい。
- ◆ つながりの必要性については多くの人が認識している一方で、「面倒」「干渉されそう」といった負のイメージが根強く、従来の地縁・血縁に依存した関係性だけでは、住民が自然に関わり合うことが難しくなっていると感じる。今後の地域福祉においては、多様な背景を持つ人が参加しやすく、負担感なく関われる“開かれたつながり”を地域の中に創り出していくことが重要だと感じる。
- ◆ 防災・避難訓練など、全員に関係があるコンテンツを入り口として地域の関係者が全員で取り組めることがあるとつながりのきっかけになるのでは。
- ◆ 地域の状況に応じてコミュニケーションの機会を意図的に作ることも必要。
- ◆ つながりが億劫に感じる人に対しては大きなつながりの場ではなく、隣近所の小さな単位でのつながりが有効な場合もある。
- ◆ こども食堂を例にとると、こどもが食事をするだけの目的だけではなく、そこにきてつながりができることで支援にも生かせる。居場所があるからつながりができる。つながりが地域の困窮の解決策のひとつのキーワードになると思う。

2. 担い手確保と参加のハードルを下げる工夫

- ◆ 元気な高齢者・アクティブシニアに対する地域活動・社会参加への促しが必要。

- ◆ 活動支援を行う担い手の居場所・拠点があると活動がしやすくなるのではないかな。また、その拠点や活動が多くの人に触れるよう開かれた場所であれば、新たな参加者の獲得や担い手確保にもつながる。
- ◆ 分野ごとにある施設や居場所を全世代や地域に開放することで、今ある資源を生かしながら地域を活性化できるのではないかな。
- ◆ 住宅地に一軒家を借りて運営している社会福祉法人が町内会の一員として核となっていることもある。こういう取り組みを活かしてつながりを作る方法もあるのでは。
- ◆ 担い手や新規参加者の確保がうまくいっている地域や団体活動の事例を集めて情報発信を行い、地域の実情に合わせてエッセンスを取り入れられるようにできるとよい。
- ◆ 住民が主体的に参画できるような情報提供の仕方、興味をもってもらえるような情報提供ができるとよいのではないかな。同様に、担い手・参加者が固定されている環境に、新しく入った人たちが居心地よくやっていきやすいような地域の居場所づくりの目的設定や動機付けができるとよい。
- ◆ 町内会の存続に関する支援が必要。定年延長等により世代交代ができない実情を踏まえ、働きながら地域をよくするための方法として ICT を積極的に活用するなど、負担なく、誰もが参加できるようにしていく必要がある。地域の力に頼るだけでなく、行政のかかわりも必要。
- ◆ 例えば町内会では働く世代が増え、土日を使って地域活動をするのが大変。ただし、今の時代は多くの人が同じ状況であり、仕事・子育て・介護をしても、一人ひとりができる範囲で担っていく地域にしていけるとよいと思う。
- ◆ 時代に合わせて組織のあり方や活動の方法なども変えていかなければいけない。

3. 福祉分野を超えた連携・民間企業・CSR の活用

- ◆ 仙台市の都市部である強みを活かすような施策や取り組みができるとよい。例えば、福祉の協議に様々な民間企業の力をうまく取り入れ、民間企業と連携しなら地域活動を展開するなど。
- ◆ 仙台市が地域活動を積極的に行う民間企業を認定企業とするなど、民間企業が地域活動に力を入れやすくなるような動機付け・仕掛けを行えるとよい。
- ◆ 民間企業の社会貢献活動、CSR と地域づくりをうまく絡めていく視点も必要。分野横断的なつながりを行うことのメリットを見いだせるとよい。
- ◆ 興味がある人だけ頑張ることには、限界がある。民間企業の活用もしていく必要があり、地域活動に興味がある企業は福祉的な情報発信に触れると思うが、興味のない企業も巻き込む方策も考えないといけない。
- ◆ 社会福祉連携推進法人制度の取り組みのように、多様な主体が地域を支えていくような体制づくりも有効ではないかな。
- ◆ 福祉だけではなく、様々な領域と連携協働する必要がある。また、様々な領域で取り組んでいる事例や課題を共有できる場を創出できるとよい。

- ◆ 不動産や経済的な考え方と福祉的な感覚をうまく連携させる必要がある。住宅部門含め他分野との相互理解を促す必要がある。
- ◆ 個別の事例においても、複雑化する課題に対して継続的な支援ができるよう様々な専門機関が協働して伴走型支援をシステム化できると一番良いのかもしれない。

4. 多様性・共生の視点

- ◆ 一つのキーワードとして多様性があるし、共生社会を目指す中、いろんな障害をお持ちの方、外国の方を含め、多様性、共生の理解が重要である。
- ◆ 従来の福祉の前提では支える側・支えられる側という前提があったが、地域共生社会ではその前提を取り払い、支える側であっても孤独孤立等の問題があり、誰もが支えられる側になりうる。支える、支えられるという関係ではなく、相互に支えあうという風な前提に代わっている視点を踏まえる。
- ◆ 再犯防止を含めて、予防的な支援が大切である。
- ◆ 既存の枠組みにとらわれない自由な制度や地域活動ができるとよい。

5. 誰も取り残さない社会の実現に向けた視点

- ◆ こども・若者分野については子育て世代から小中学校、大学、社会人とライフステージやおかれた状況ごとの支援となってしまうため、本人が意識しないと必要な支援につながりづらい状況である。切れ目なく支援を必要とする人に情報提供や支援ができる枠組みを作っていく必要がある。
- ◆ 連携・切れ目のないという大きな支援の枠組みを制度化すると、その制度から漏れてしまう個々の人たちも出てきてしまう。制度は万人向けにしなければならず、個々のニーズすべてを拾うことができないため、町内会・隣近所とCSWが連携するなどして、個々の対応の視点も必要である。